

2014 年度入学式 学長式辞

埼玉大学のキャンパスは、今朝も、桜の花が名残惜しそうにその美しさと存在感を放つとともに、それに置き換わるかのように、櫻をはじめとした木々のフレッシュでやわらかな緑の葉が芽吹いてきていました。

このように、春の装いを色濃くし、希望に満ち溢れた今日の良き日、ここに入学式を迎えられた 1,720 名の新入生の皆さん、入学おめでとうございます。埼玉大学の役員、教員 450 名、職員 220 名、そして約 7,000 名の在學生を代表して、皆さんの入学を心から歓迎します。

また、式典にご参列くださいましたご家族の皆様方に対しましても、心からお祝いを申し上げます。

私はこの 4 月から学長を務めています。学長が直接、一堂に会した皆さん全員にお話しすることが出来るのは、この入学式と 4 年後の卒業式だけです。それを思うと、この式辞の重みを実感せざるを得ません。入學生に贈る言葉を並べることに加えて、埼玉大学の状況や将来像、そして大学への学長の想いをまずお話ししたく思います。

皆さんは、「国立大学改革プラン」というものを知っていますか？ これは文部科学省が昨年 11 月に公表したもので、グローバル化、少子高齢化の進展、新興国の台頭などによる競争激化といった、日本が直面する社会状況の変化の中、国立大学に対して、社会の変革を担う人材の育成、イノベーションの創出といった役割を果たすため、機能強化に取り組むことを求めるものです。

埼玉大学では、学部のそれぞれに強み・特色・社会的役割を特定し、大学全体として行いうる機能強化のための戦略を、イノベーションの創出に対応した研究力の強化、および理工系人材、人社系人材の育成の強化と教員の養成の強化、という形で自ら具現化しました。本学のこの機能強化構想は、大学改革の先導的モデルとして文部科学省から高く評価され、国立大学改革強化推進事業に選定されています。

改革のキーワードは連携と融合。理学部と工学部、教養学部と経済学部、そして教育学部が 1 キャンパスに集約されているという埼玉大学ならではの特長を活かして、学部という組織の枠や人文・社会・自然科学という学問の枠を越えた真の連携とシナジーをもたらし、これまで埼玉大学においては必ずしも顕在化しなかった潜在的能力を組織的に発揮させて、埼玉大学総体として全国的な教育研究拠点としての光を放ちます。その上で、地域のニーズに応じた人材育成や地域活性化機関としての役割をも積極的に担っていきます。

私は学長として、この機能強化構想を着実に進め、自他共に誇れる「知の府」としての埼玉大学を、活気があり活力みなぎる大学として埼玉から世界へと展開していきたく思います。そして、新たに入学された皆さんにも、埼玉大学の一構成員として誇りを持ち、ダイナミックに変革する埼玉大学の一翼を担っていつてくれることを大いに期待しています。

国立大学に期待される機能の一つである、社会の変革を担うグローバル人材の育成についても、埼玉大学では構想を具体化し、種々取り組んできています。例えば、既に実績のある全学的な **Global Youth** プログラムや、文部科学省の支援を受け、教養学部が先導して推進するグローバル人材育成プログラムの他、今年度から、教養学部ではニューヨーク州立大学ストーニーブルック校とのダブルディグリープログラムを開始します。さらに、学部から大学院までの6年一環教育を導入しつつある理工学研究科では、教員同士の日頃の研究連携をベースとして、埼玉大学と海外の協定大学の研究室間で学生を行き来させる交流プログラムも充実していきます。

ただ、このような特別な教育プログラムに参加することだけが「グローバル人材の育成」に繋がるものではありません。埼玉大学には500名もの留学生が同じキャンパスで学び、大学生活を共にしています。その留学生達との様々な交流をはじめとして、海外での研修、研究発表など、「グローバル」に関わる沢山の機会を皆さん自ら、積極的に捉えることもとても重要です。

そもそも、「グローバル人材」とは一体何でしょうか？ 英語によるコミュニケーション能力、柔軟な思考力、異文化への理解力と適応力、等々の能力を有し、グローバルマインドを持った人材、でしょうか？ いろいろな人達が様々な、また特別な教育プログラムごとに「グローバル人材」を定義していますが、答は一つではなさそうです。そのような様々な定義は理解した上で、皆さん一人一人が、「グローバル人材とは何か」を考えることが大切であると思います。

この3月に、マサチューセッツ大学ボストン校の **John W. McCormack Graduate School of Policy and Global Studies** の Dean、つまり、政策国際研究大学院の長である **Ira A. Jackson** 先生から、大きな額に入った **Leonard Zakim Bridge** という名の橋の写真と、それに添えられて手紙が私宛に届けられました。

Leonard Zakim Bridge はボストンのチャールズ川に架かる橋で、マサチューセッツの交通渋滞緩和のためのハイウェイ・プロジェクト、**The Big Dig** の一部として建設され、斜めに張ったケーブルで橋桁を直接吊り上げる斜張橋と呼ばれる形式としては、世界一の幅員、つまり橋の幅を有します。斜張橋の例として身近なものは、埼玉大学キャンパスからも遠く見ることのできる、荒川に架かる幸魂大橋や、横浜港に架かる横浜ベイブリッジがあります。

Jackson 先生が橋の写真を送って下さった背景には、この1月、私が研究・国際担当理事・副学長として、今後の交流の打合せのため、マサチューセッツ大学ボストン校に彼を訪問した際、私が、**1991 m** という世界最長スパンの吊橋である明石海峡大橋の風に対する設計に関わっていたことに話が及び、また両校の交流を「架け橋」に例え、話が弾んだことがあります。因みに、明石海峡大橋の風に対する設計、つまり耐風設計の最大の焦点は、1940年に、風速わずか**19 m/s**の風で大きく振動して落ちてしまった、当時、世界第3位の長大吊橋、アメリカ・タコマ橋の災害の教訓を活かすことにありました。

前置きが長くなりましたが、**Jackson** 先生からの手紙を紹介しましょう。

Dear Yamaguchi-san.

This photograph of our inspiring Leonard Zakim Bridge is meant as a symbol of our growing links between Saitama University and the University of Massachusetts Boston.

As you assume the Presidency of Saitama University, I wish you nothing but the best.

As the designer of the world's longest bridge, I'm hopeful that you will help us to design a world-class connection that spans our two universities and strengthen the ties between our two great countries.

My school stands ready to anchor the footings of the bridge from our end and we are eager to begin seeing traffic flowing often and freely in both directions of the Saitama-UMass Boston Bridge.

All the very best,

Ira A. Jackson
Dean

これに対し、私は、狩野秀頼の室町時代の筆「観楓図屏風」の写真が印刷された便箋を使って簡単な礼状を送りました。そこには主題の楓とともに、皆が集う庭園の中央に木造の太鼓橋が描かれています。

Dear Jackson-san,

Thank you very much for your surprising and wonderful gift; the photo of Leonard Zakim Bridge, with your warm and kind letter. I enjoy both of them and would like to express my heartfelt thanks to you.

Yes. Bridge is very important to span two different spaces as well as cultures leading to further development. As new President of Saitama University, I'll try to do my best for the UMass Boston-SU Bridge, which can be constructed step by step in the collaboration process.

Thanking you once again,

Sincerely yours,

Hiroki Yamaguchi
Vice-President for Research and International Affairs

政策国際研究と橋の耐風設計研究という、全く異なる研究分野に身を置く日米の二人が、大学間の国際交流という共通テーマの下に繋がった、一つの小さなエピソードでしかないのですが、ここに紹介しました。「グローバル人材とは何か」を考える上

での参考になるかも知れません。繰り返しますが、答えは一つではなく、また人から教えてもらうような性格のものでもありません。皆さんには、「グローバル人材とは何か」を良く考え、それに対する自分なりの答を是非、見つけて欲しいと思います。

ところで、私は 1971 年に当時の理工学部建設基礎工学科に入学し、大学生としての 4 年間で埼玉大学で過ごしました。その時に出会った恩師お二人の講義や卒業研究での指導、さらには日頃のお話に触発され、学問の面白さ、広がり、奥深さや大学の在り方を実感したことが、その後の私の大学における研究キャリアの、そして今の私のポジションの原点になっています。お一人は岡本舜三先生で、後に世界の **Legend of Earthquake Engineering** の一人に選ばれた地震工学の世界的権威であると同時に、埼玉大学第 5 代学長でした。岡本先生には構造物の振動の不思議さに目覚めさせて頂き、このことが、先程お話しした私の明石海峡大橋の耐風設計研究に繋がっています。もうお一人は秋山成興先生であり、構造力学の本質を教えてくださいとともに、「君は埼玉大学に戻り、埼玉大学のために学問研究に尽くせ」と諭されました。私の心には岡本、秋山両先生の言葉が今でも深く刻まれており、私の研究に対する強い思いと埼玉大学に対する学長としての熱い使命感はここから来ていると思っています。

今日の入学式では、特別講演として、本学名誉教授、加藤泰建先生にお話し頂きます。私より身長がさらに 3 cm 高い加藤先生は、この 3 月まで教学・学生担当理事・副学長を務められ、最初にお話しした埼玉大学の機能強化構想と一緒に、精力的に構築して下さいました。今日はその話ではなく、加藤先生の本当のお顔である先史アンデス文明の動態解明に関わる研究、学問について熱く語って頂けるものと思います。文系、理系を問わず、大学における学問の自由さ、奥深さと広がりという学問の空間を是非、感じ取って下さい。皆さんの大学における学問の第一歩です。

人間の営みには、その空間を表す座標軸に加えて、同様に重要な時間軸があります。人とのさまざまな出会いも含め、大学での生活はその人の人生の中でとても重要な時期であり、時間であると思います。しかも、大学での時間は有限です。皆さんが、学問をはじめとして様々なことに触発され、時間とともに目的意識をより一層明確にして、充実した大学生活を送り、さらに成長して行かれることを最後に祈念して、私の式辞とします。

平成 26 年 4 月 8 日

埼玉大学長 山口宏樹